

星の匂い

松島詠子 東京都

「死んだらお星様になるんだよ。」と言うのは、間違いではない。私たちは死んだら土に還り、宇宙空間に浮かぶ、地球というひとつの星の一部になる。その過程で私たちはこの星の匂いに包まれ、やがて同化する。ひとつの星になることを受け入れられるように、私たちには、星の匂いと言うものは心地よく感じられるようできているのではないだろうか。死した後、自分と言う存在をその媒体に委ねて溶けて行くことは、快感なのではないかと私は想像する。美しい星になるのは、悪くないと思うのだ。

私は、ある満天の星空の下、星の匂いというものを知った。普段、星は遙か遠くにあって、もちろん匂いなんて感じることはできない。けれど、それを当然のように思っ暮らす生活から離れる時、稀に星の匂いを嗅ぎ分けることができる。首が痛くなるくらいに見上げて、思い詰めて星空を仰ぐ時は星の匂いはかすめもしないが、すべての身体の力が抜けると、星の匂いは自然にそこを漂っている。そしてそれは、実はよく知った匂いだ。

星の匂いは、氷水の匂いによく似ている。グラスを傾けて、唇に氷水が触れる時の匂い。清涼感ある柔らかな鮎物の匂い。

しかし、これは妙な話だけれど、私はハリボテの星空で星の匂いを知った。どういうことかと言うと、そこは昼間のプラネタリウムだったのだ。しかもそこは日本でもなくて、インドの首都カルカッタのプラネタリウムだった。その時、プラネタリウムの球形の屋根には、赤道直下の眩しい太陽光がさんさんと降り注いでいた。つまり、この話が意味すること。それは、星のその配列は、空そのものは偽物であったとしても、第六感を開放する鍵に十分に成り得ると言うこと。だから、プラネタリウムで星を買うのは決して無意味なことではない。

21歳の時に、ひと月かけてインドを旅した。バックパックを背負って、サンダルでインドの北部を巡った。私が旅した3月、インドは乾季で、白い日差しが容赦なく照り付けていた。暑かった。日本の暑さとは違う、乾いた厳しい暑さだった。立ち寄ったレストランで、ここは涼しいと思って見た温度計が、40度を示していた。

旅が半ばを過ぎた頃、私はカルカッタに着いた。長い旅で、私は予想以上に体力を消耗していた。とにかく、その暑さが原因ではあった。暑いからと言って、滞在する安宿にはエアコンなんてない。たまに天上にファンのついた部屋もあったが、それはただ、部屋にこもった生ぬるい空

気を、くるくるとかき混ぜるだけのものに過ぎず、私はよく休めないまま旅を続けていた。

暑さに加えて、インドと言う土地が未知の刺激に満ちた場所であることが、私をずい分疲れさせた。とにかくそこにいるだけで五感を刺激し続ける情報量が多く、その処理に体力を使うのだ。異国でのそうした刺激は、旅の前半では魅力的に感じられ、だが旅が続くうちに、それはだんだんとストレスになって溜まった。

例えば、私はインドの街で通りを横断しようとする。まず目に入るのはとにかく人。人が多い。人を掻き分けて進まねばならない。女性の着ている極彩色のサリー（インドの民族衣装）が、残像のように目の前をちらちらとかすめる。ひとつの通りには、おかあさんのおっぱいを飲む赤ちゃんから、座り込んで煙草を燻らす老人まで、それから黒く大きな牛も、白くやせたヤギも、皆が集まっている。そこで、野菜を売ったり、追いかけてっこをしたり、喜捨を求めたりしている。そしてその合間を、車やバイクやリキシャーと呼ばれる人力車がすり抜けて行く。そこは、歩行者専用の道路ではないのだ。だが、もちろん横断歩道なんてない。私はその通りを、暑さでもうろうとした頭で、車に惹かれないよう、大麻を売る売人やスリに目を付けられないよう、牛の糞やお供えされた花を踏んづけないように渡り切らねばならない。私の神経は、通りを渡るだけで敏感になり、そして消耗した。そこにいるだけで聞こえてくるのは人々が話す聞きかれない言語（インドの公用語は英語だが、多民族国家であるインドでは、実際には何十もの言語がある。）とスピーカーから大音量で流れるマントラや音楽、食事と言えば香辛料のよく効いたカレーと甘すぎるチャイ（インドのミルクティー）、常に皮膚に当たるのは差すような日差しと砂を含んだ熱風。

私を一番刺激し続けたのは、インドの匂いだった。それは、簡単に言うと人の匂い。もちろん、そこが異国であるからと言う理由の嗅ぎなれない匂いと言うものもあった。でも、それとは分けて特にここで言いたいのは、人間が生きていて、そこで暮らしている混沌とした匂いのこと。インドはそれが濃い。その匂いとは言うが、それは、色んな匂いが複雑に混じり合っていて、火にかけて鍋から溢れる香辛料の匂い、澱んだ排水の匂い、家畜が食べる青草の匂い、寺院でお香を炊く匂い、朽ちていく果物の匂い。そうやって拾い上げられる匂いは少なく、ほとんどが判別もつかないほどに交じり合っている。その匂いの原型は、日本にももちろんある。ただし、それぞれの生活の営みの匂いが、交じり合うことが少ない。言うならば、日本ではきちんと閉められた引き出しの中で皆が生活をしているが、インドではその引き出しが全部開けっ放しと言う感じなのだ。

私は、カルカッタに立ち寄る前の街で、高熱を出して寝込んだ。これは、風邪を引いて熱が出たのとは、少し違うように思う。その情報量のあまりの多さに、自分自身がオーバーヒートしてしまったのだと思う。熱は一晩で上がるだけ上がって、朝になると嘘のように引いた。翌日は体中が痛くて、自分から水分が減って老人のように乾燥しているのがよくわかった。だけど、不思議と身軽になってさっぱりした感覚もあった。自分に残っているのは必要最低限の機能で、それがこの国に最適なサイズなのだと感じた。

カルカッタのホテルで、病み上がりの私は、ベッドに寝転んで日本から持って来たガイドブックを見ていた。カルカッタには数日滞在する予定だったので、観光でもしようかと考えていたのだ。そこで、私はあの不思議な娯楽施設を見つける。インドのプラネタリウム。なぜ、プラネタリウムを選んだかと言えば、その理由はあまりに単純だった。プラネタリウムには冷房が効いている、とガイドにそう書いてあったのだ。

インドのプラネタリウムは、日本のそれとほとんど変わらなかった。それはつまり、そこがインドでどれほど限られた場所であるかを意味する。冷房が効いていて、清潔で静か。上映時間が決まっており、チケットもスムーズに購入できる。この国の鉄道が、時刻表通りに来ることもなく、切符を買うのにも手惑うことを考えると、何ときちんとした施設だろうと感心してしまう。

このプラネタリウムでは、英語、ベンガル語、ヒンドゥー語の上演があって、私が行った時はヒンドゥー語の回だった。英語なら少しは理解できたかも知れないが、英語の回を灼熱の屋外で待つ気分にはなれなかった。

席についてしばらくすると、場内の照明が落ちて球形の天上に星が浮かび上がる。日本のプラネタリウムと、同じ流れだ。そういえば、インドでは本物の星は見てないなあと思った。天気はよくても、砂埃のせいなのか何となくインドの空はくすんでいるような気がした。街がごちゃごちゃと、夜でも賑やかで明るいことも、星がよく見えない一因かも知れない。いや、それよりも。地上の色んなことに気をとられている時、私は空を見上げることを忘れる。星は、いつでもそこにあるのだけれど。

次に私がふと気付いた時、天井の星は消えていた。私は知らぬ間に寝入ってしまったようだった。身体が疲れていたこともあったし、冷房の効いた快適な温度と、照明の落ちた館内、呪文のようなヒンドゥー語の解説、それが麻酔のようによく効いた。何の感覚もない静かな眠りだった。いつ眠ったのかもわからず、寝ていたのも一瞬のことに思えた。

ぞろぞろとプラネタリウムを後にする人に続いて、仕方なく私も外へ出た。外には眩しい光があった。出入口を境に、外の熱気がべったりと身体に張り付いた。そして私は、体温よりあたたかい空気を吸い込む。

その瞬間だった。私は確かに、そこで星の匂いを感じた。不思議なことに星の匂いは、インドのあの複雑な生活の匂いの中に含まれていた。そしてそれを、一瞬だけ私は強く感じたのだ。それが星の匂いだと言うことは、すぐにはっきりとわかった。そういえば、私はそれを、地上に生まれて以来ずっと感じ続けていた。よく知った匂いだった。

星の匂いはすぐに散ってしまった。私は今過ぎた出口を振り返る。プラネタリウムの天上には、この街の、この世界の混沌とは、無縁のようなただ美しいだけの星空があった。あれは全く別世界のものだと思っていたのに、そうではない。

そうして私は、ここがひとつの星であることを思い出した。人が生きて暮らしている混沌の底辺には、いつも地球という星が夜空に輝いている神秘に、その日私は気が付いた。